

# 毛皮交易史の研究(4)

— 毛皮の世界フロンティアと人種奴隷制度 —

下山 晃

はじめに

第I章 中世「国際商業」の展開と毛皮貿易

- 1 ヴァイキング
- 2 ロシア商人の起源
- 3 ハンザ同盟の抬頭
- 4 中世ヨーロッパにおける毛皮資源の枯渇 (以上, 51号)

第II章 ユーラシア毛皮交易圏

- 1 ヨーロッパ=イスラム商業圏
- 2 モンゴル帝国と毛皮取引
- 3 モスクワ商人とヨーロッパ市場 (以上, 52号)

第III章 植民期アメリカの毛皮貿易

- 1 白いインディアン
- 2 ハドソン湾会社の創設
- 3 セント・ローレンス商業帝国 (以上, 54号)
- 4 ニューイングランド連合 (4~6は割愛)
- 5 製帽工業と重商主義
- 6 人種奴隷制プランテーションと毛皮

第IV章 毛皮の世界フロンティア

- 1 コサックの東漸
- 2 アリュシャンの受難
- 3 ノア=ウェスターズ (以上, 本号)
- 4 アスターズ・トラストと広東貿易
- 5 アメリカ西部の毛皮フロンティア

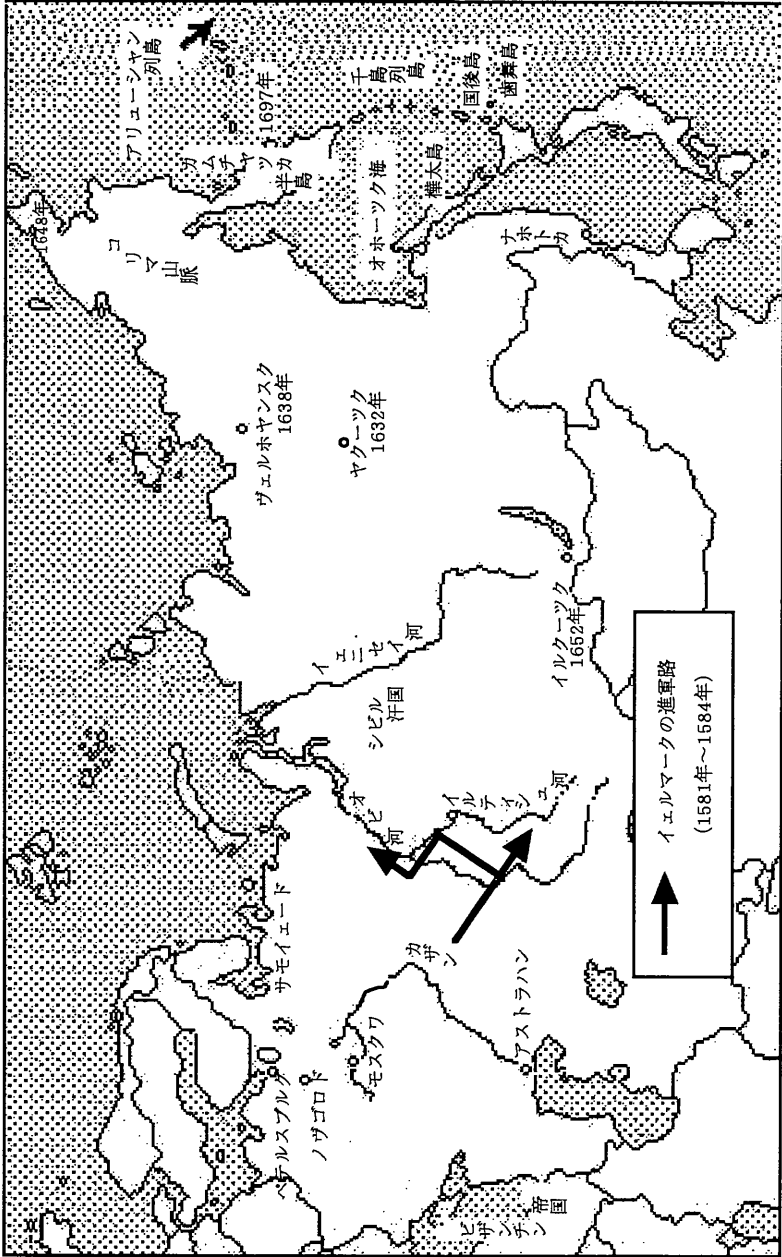
第V章 極東の開国と毛皮

— 世界フロンティアへの三つの通路

- 1 中露陸路貿易ルート
- 2 夷館取引の展開
- 3 日本の開国・文明開化と毛皮

おわりに

— 掠奪のシステムの帰結



## 第IV章 毛皮の世界フロンティア<sup>(1)</sup>

### 1 コサックの東漸

フランス系・イギリス系の移民および新生アメリカ合衆国の商人たちを中心として北米大陸の毛皮フロンティアが西へ西へと開拓されていった頃、コサックに先導されたロシア人の活動を通じて、シベリア一帯の毛皮フロンティアが東に向けて開拓されていた。これは、西欧世界を中核として拡張した国際分業システムないしは世界商品流通システムが、大西洋経済圏とユーラシア北半部の従属的経済圏を同時に形成していったことを意味している。この北米とシベリアで同時進行した毛皮フロンティアの開拓は、第II章でみた「ユーラシア毛皮交易圏」を雛型にしながらも、単に特定の政治的権力者への毛皮の貢納を基本とするに留まらず、ヨーロッパを中核とした世界市場のネットワークへの連結を特徴としていた。以下にみる通り、すでに16世紀の中葉までに、毛皮のフロンティアは、西洋世界を中核とした「世界フロンティア」を形成しはじめていた。

15世紀の内にモンゴル、さらにはアストラハンやカザン、ノヴゴロドを凌いでやがては17世紀にシベリア全域をも支配するに至ったモスクワ公国の抬頭についてはすでにふれた。東方の弱小な諸族にロシア人支配層が「ヤサク」と呼ばれた厳しい貢納を課し、莫大な数量の毛皮を徴収したことについてもすでに若干の論及を行なっておいた。そこでは、ロシアからの南方向け毛皮輸出が拡大の一途をたどった点にもふれ、当時の毛皮の交易網が黒海・地中海周辺のビザンチン（その最後の皇帝の姪ソフィアがイヴァン3世に嫁ぎ、ロシアが東ローマの後継者を自任したことは衆知）やイスラム世界にまで及んでいたことに着目しておいた。本章では、コサックを先兵としたロシア商人のシベリア開拓の推移をさらに詳しくたどり、その活動がオホーツク制覇の後にアラスカにまで及んでアメリカ商人の西部開拓運動と遭遇するに至る過程を明らかにすると共に、北米の毛皮フロンティア開拓の概略を一望し、これらの毛皮開拓運動の怒濤が中国・アジア市場の支配をめぐる覇

権争奪戦にどのように波及し影響しはじめたかを解明してゆきたい。

北米大陸東部一帯においてフランス系の狩猟者 *coureurs de bois* たちが毛皮フロンティアを開拓しはじめた 16 世紀の半ばは、実はユーラシアの毛皮フロンティアにとっても大きな画期となる時期であった。

1553 年から 56 年にかけて、リチャード・チャンセラー〔?～1556 年〕の二次にわたるロシア探検が行われた。この探検活動は、後年、リチャード・ハクルートにより「ヴァスコ・ダ・ガマのインド航路発見に匹敵する大偉業」と称賛されたが、実際、陸路の探検史の上ではきわめて大きな意味をもつ大事業であった<sup>(2)</sup>。「大航海時代」とは「大踏破時代」でもあった。折しも、1552 年から 54 年にかけて「雷帝」の異名で知られるイヴァン 4 世〔1530 年～1584 年〕がカザンとアストラハンを占領したことは、旧来のロシアとアジアの関係を一変させていた。以来、ロシア産の毛皮は、西ヨーロッパの市場において大きな比重を保ち始める。カザン、アストラハンの征服はヴォルガ河の水源地域から河口に至るまでの全流域をモスクワ商人の勢力下に置き、モンゴルの覇権は一掃されてロシア帝国の抬頭を導く基盤を築いた。

ロシア帝国が抬頭しはじめた時、ウラル東方のオビ河（およびその支流のイルチシ川）流域にはシビル汗国が余命を保っていたが、すでに 1554 年には、イヴァン雷帝はイギリス王エドワード 6 世宛ての書簡に「全シビルの王」という肩書きを用いた。シビル正統の統治者エディゲルは翌 54 年に雷帝への忠誠を誓い、3 万 700 人の住民一人ひとりに黒テンとリスの毛皮を貢納させることを申し出た。この時ロシア側は、雷帝自身に対して毎年 1000 枚の黒テンの毛皮を貢納し、雷帝が派遣する徴税吏にも 1000 枚のリス皮を納めるようエディゲルに念を押した。雷帝は毛皮の貢納を履行させるために、姻戚関係を左右して人質をとっていた様であるが、まもなく、エディゲルは貢納を怠りはじめたために殺され、代わりに雷帝にとり入った新しい首長により毛皮の貢納がつづけられることになった<sup>(3)</sup>。

カザンとアストラハンとシビル、つまりはウラル一帯の全地域から大量の

毛皮がモスクワに向けて送られはじめ、黒テンの毛皮で縁取られた王冠はロシア皇帝（ツァー）のシンボルとなって「カザンの帽子」と呼ばれた。自身も時には暴行も受け、少年時代にしばしば屈辱的な境遇に置かれた経験を持つイヴァン雷帝にとっては、権謀術数と虚栄が絶えず渦巻くロシアの新興上流社会の中では、誰もが称賛してやまない「柔らかな宝石」＝毛皮こそが、富とゆるぎない権力を保証する確かな証であり、毛皮圏の支配こそが政治的支配を確保するための唯一の拠りどころであった<sup>(4)</sup>。イェルマク・ティモフェーヴィチ〔?～1584/5年〕に率いられたドン・コサックによって、シベリアの東端にまで至るロシア帝国の史上稀有な勢いの大拡張事業が毛皮資源獲得を第一の目的としてまもなくはじまることになるが、それもイヴァンの境遇と性格から推し量れば、また今までに考察してきたノヴゴロド以来の毛皮史の流れに鑑みれば、いわば当然の歴史的推移だったといえる。これ以後、シベリアから送られた毛皮はヨーロッパ製の最新式の銃器を買い入れる資金源となり、そしてその銃器がシベリアのフロンティアを一挙に拡大してさらに大量の毛皮をモスクワにもたらす、というサイクルが出来上がっていった。ロシアの王権は、雷帝の時代に一気に強化された。

コサックのシベリア遠征事業の後ろ楯となったのは、イヴァン雷帝お抱えの毛皮商人・製塩特権商人として勢威をふるっていたストロガノフ家であった。製塩業経営の独占と苛烈をきわめた地代のとり立てによる蓄財もさることながら、かねてよりこの一族は、ウラル北西部に蟠踞して「互いに食らい合う者」と呼ばれ恐れられていたサモイェードの民と大々的に毛皮を取引し、そこから得られる巨大な利益に着目しはじめていた。サモイェードたちは、北米フロンティアの先住民と同様、高価な毛皮を雑多な「安びか物」と喜んで取り替えたため、ストロガノフ家にもたらされる実質的な富は莫大なものであった。同家は1558年、イヴァン雷帝からシベリアの開拓・植民を請け負った「領有証書」の交付を受け、特権事業としてのシベリアの経略にのり出した。この頃すでに同家は、中国との毛皮取引を独占するという、当時としては一般には夢物語と思えた壮大な企てを抱いており、わざわざオランダ

から探検家を雇い入れてシベリアの実情調査に専心していた。実際に植民開拓の担い手となったのは皇帝とストロガノフ家によって強制移住を強いられたウクライナからの逃亡農奴すなわちコサック（コザック、ロシア語ではカザーク）と毛皮商人、それに毛皮猟師たちであった。彼らは自立的な一種の軍事共同体を単位に居住して「黒テン狩り部隊」を組織し、北東ウラル近辺の広大なフロンティアを慕進した。行く先ざきで少数民族はことごとく大量の毛皮の貢納を強要され、従わぬ者は容赦なく辺境開拓のために奴隷化され、また命を奪われた。

やがてウラルの麓にストロガノフ商会の恒久的営業所が置かれ、付近一帯の毛皮取引の支配に野望を抱いていたマキシム・ストロガノフが所長に任命された。時折シビルの兵がサモイェードの村落を襲ったため各地で交易路は寸断され、マキシムは已むなく引き上げを決定するが、折も折、度重なる掠奪の容疑で雷帝に追われて逃亡流浪の生活を送っていたイェルマクがマキシムの営業所に転がり込んで来た。マキシムは小銃の供与とひき換えに異教徒の掃滅をイェルマクに依頼、西へ帰ればどうせ死罪の身と悟っていたイェルマクは東への遠征事業を快諾した。死罪が帳消しとなるばかりでなく、皇帝軍の英雄として称えられ、莫大な褒賞金が期待できたのであるから、「話に乗らぬ」という手はあるはずもなかった。

1581年、800名のコサック兵を指揮してシビル汗国に攻め入ったイェルマク軍団は、500名の兵士を失いながらもまたたく間に首都トボリスクを陥れ、汗国勢力をウラル山脈の遙か彼方に駆逐した。イェルマクはシビルの全領地を雷帝に献上し、シビル追討のための援軍の派遣と罪状の赦免を願い出た。イェルマクがモスクワに派遣した代理人は、シビル征討の戦闘の途次に各地で略取して集めた大量の毛皮を献上品として皇帝に差し出した。雷帝はイェルマクの過去の罪科をすべて赦免する寛大な処置で報い、長年愛用した甲冑を下賜したという。雷帝がこの時得たのは、「珍品中の珍品」と伝えられていた黒ギツネの毛皮20枚の他、50枚のビーヴァーの毛皮と、2400枚もの黒テンの毛皮であった。

ロシアで至高の地位に登りつめた雷帝が、愛用の双頭の鷲の紋章を彫り込んだ甲冑を盗賊あがりの下賤なコサックに下賜したことは、当時の慣例からみてまったく破格の待遇を意味した。というのは、元来、鎧や兜は由緒ある高貴な貴族や高潔な騎士にだけ着用が許されてきたもので、しかもビザンチン皇帝の血統に連なったばかりのロマノフ家の紋章入りの甲冑を与えられた者は、それまでロシア社会の中に誰一人として居なかったからである。この特別の恩賜により、コサックは何より重要な「名誉」を得て皇帝の股肱<sup>ここう</sup>の臣となり、聖なる権力者と賤なる機動部隊とが以後は一体化した。植民地時代の北米での場合と同様にロシア版の Fur Baron が生まれた訳であるが、このことは実は、社会における「名誉」をひとつの支柱として成り立っていた中世的な政治支配の身分配置の構図を、根底から変質させる要因をも含んでいた。中世にあっては、社会の枠の中で「名誉を持たざる者がすなわち賤民」なのであって、そうした社会的な身分規定は、中世人の宇宙観や自然観、そして「自由」の概念などと分かち難い形で強固に結びついていてもいた<sup>(5)</sup>。ロシア中世はまさに、雷帝とイェルマクが手を結んだことによって、従ってシベリアの毛皮資源の開発・収奪をきっかけとして、変質し瓦解しはじめたのである。イェルマクの遠征を足掛りにパトロン格のストロガノフ家も着々と領地を拡大し、19世紀に至るまでロシア最大の大地主として農奴たちから厳しい搾取を行いつづけたが、ロシア人の間に莫大な毛皮をもたらしたイェルマクは、生前にはむしろ部下の誰からも絶対的な信頼を集めて慕われ、死後には辺境民衆からも聖人の如く尊敬を集めたと言われている。なお、シビルの後継者たちはイェルマクの死後に反乱を試みるが成功せず、逆に親善を装ったロシア人の奸計にはめられて虐殺の憂き目に会うに至った。下賜された甲冑を身にまとったイェルマクをイルティシュ川に溺死させていたことだけが、シビル側にとってのせめてもの慰めであった。

それはともかく、まもなく1584年に雷帝が世を去ると貴族間に激しい権力闘争がくり広げられ、ロシアは大動乱の時代に陥った。その中で政治の実権は後継の王子フョードルが無能だったこともあり、結局ボリス・ゴドゥノ

フの手に握られることになった<sup>6)</sup>。ゴドゥノフは王位を篡奪した奸臣の典型の如き人物であるが、「誰よりもシベリアにおけるロシア勢力の強化に努力した辣腕の賢明な政略家」(J・F・バドリー)と評される面も持っていた。「国力の拡充」という観点だけから歴史上の人物を評価して差しつかえないとするなら、確かにそう断言しても良いであろう。彼の時代にシベリアへは軍政官チェルコフの指揮する軍隊が送り込まれてウラルを越えた地点(チューーメン、トボルスク)にロシア人の拠点としては最初の永住的居留地が建設され、またその後の開拓事業において重要な役割を果たすことになる数々の毛皮交易拠点が建設された。1598年に王位について後、ゴドゥノフは20年間にわたってシベリア支配を強化しながら領土を拡張し、その繁栄を確保してロシアの覇権を確立することに最大の関心を払いつづけた。支配権を獲得して以後、かれが直ちに老若男女の区別を問わず無数の人民と政敵をウラルの彼方へと送りつけたのは、彼がロシアにとってのシベリア開拓の重要性を誰よりも熟知していたからに外ならない<sup>7)</sup>。これ以後、シベリアは小国に分断されることはなく、ロシアの流刑地・毛皮調達源として存続することになったのである。

ところで旧シビルの領内には、「ロシアの黄金」と言われた褐テン、黒ギツネ、銀ギツネ、ビーヴァー、カワウソ、そして黒テンなど極上の毛皮をまとった毛皮獣が無数に棲息していた。特に黒テンの毛皮は「金の羊毛」と呼ばれ、その呼称どおり金と同等の価値を有したためコサックたちは汗国征服後も遠征(開拓)事業に狂奔、驚くほどの勢いでシベリアの開拓が進展することになった。すでに1600年には、実に年間100万枚の毛皮がシベリアからモスクワへと送られ、ロシア帝国の絶対王政は一挙にその経済基盤を獲得した<sup>8)</sup>。シビルの領地を越え、更に東のフロンティアを支配するならば、ロシアの栄光はかつてモンゴル帝国が達成したように、無比のものとなる可能性を秘めているように思われた。

極寒の地に点在する村々の征服は、銃があれば、いとも容易く<sup>なやす</sup>達成することができた。毛皮獲得熱と銃による容易な征服の実現は東方征服事業に拍車



をかけ、トムスクやヴェルホヤンスクをはじめ幾つもの町や交易所、城砦（小規模な要塞が多く「オストロク」と呼ばれた）が次つぎに建設されていた。1605年にゴドゥノフが世を去ると再びモスクワは動乱に陥ってロシア帝国の植民事業は中断しかけるが、しかし、ゴドゥノフが貴族層から評判を得るために生前に制定していた「農奴法」は非常に徹底したものであったため、シベリアへの貧民・罪人の配流は、常に絶えることがなかった。しかもヨーロッパ・ロシアでの政治的・軍事的動乱は、流刑者や殺人犯、盗賊、反逆者、孤児などの大量の流民・難民をたえずつくり出していた<sup>(9)</sup>。

概して帰るべき土地を持たなかったシベリアへの移住者たちにとっては、行く先々で毛皮や金銀宝石を獲得することがせめてもの生きがいとなった。「金の羊毛＝黒テン」にはすさまじいほどの吸引力があった。ヨーロッパ・ロシアからの移住者たちは早くも1630年代には中央シベリアのイェニセイ河を越え、40年代半ばにはオホーツク、そして70年代後半にはユーラシア大陸北東端のカムチャツカ半島にまで到達した。コサックの先発隊はすでに1638年に太平洋の沿岸部にたどり着いていたという言い伝えも残されている。39年にはレナ河流域にヤクーツクが建設され、黒テンをつかんだ驚（すなわち毛皮を支配するロシア皇帝）を町の紋章にしたという史実が確認されていることに鑑みれば、その言い伝えもあながち根拠なしとは言えない<sup>(10)</sup>。かつてモンゴル族が示した怒濤の進撃を、コサックたちは逆向きの方向に、しかももっと精力的な形で再現したのである。そうした暴力的な破竹の進撃は、当然のことながら各地に絶えず先住民族やモンゴル兵とコサックとの間の衝突をひき起こしたが、コサックは徹底した破壊と略奪をくり返しながら前進をつづけた。シベリアを突き進んだコサックや流民たちの大部分は男性であったため、シベリアのフロンティアでは男女関係・家族関係はきわめて不道徳かつ不安定なものとなった。女性の不足を補うために「これ以上は墮落しようのない」女性が詐欺や人身売買で集められて集団で東方に送られ、「適度の基準」に従って分配された。また、コサックや流民たちは征服した村々の女性も略奪して妻や妾としたが、彼らの関係は非常に締まり

のないもので、女性たちの多くは男の意のままに捨てられたり売られたり交換されたりした。高位の僧侶を含めて妻帯や蓄妾の習慣が広まり、そのために禁欲を第一の信条とする保守層とシベリア移民の間でかなり雑多な宗派分裂も起こった。18世紀には禁欲派の信者はしばしば自ら火中に身を投じるなど、節度ある生活態度の重要性を躍起になって強調した。こうした点でも、北米の英領北部植民地に現われたピューリタンによる狂信的神政政治の展開と相通じる面があり<sup>(11)</sup>、留意の必要がある。

なお、太平洋岸にまで至り、きわめて残酷な仕打ちでカムチャツカを征服したコサック遠征隊の一派は、やがて南へ折れて今の青森県沖に出没（1739年）し、68年にはバイカル湖南岸のイルクーツクに日本語学校が設立された<sup>(12)</sup>。そしてカムチャツカに至った今ひとつの一派は、そのまま東漸をつづけ、18世紀初頭の内にアリューシャン列島伝いに北米大陸北西端のアラスカ半島に上陸し、アメリカ西部・北西部で展開していた西向きの毛皮フロンティア開拓運動と遭遇することになる。15、6世紀に胎動した東西両方向へのヨーロッパの商業的拡張は、この毛皮の世界ではじめて一個の「世界システム」を形成する。ベーリングやチリコフといった、教科書でおなじみの探検家たちが登場するのは、ようやくこの時点になってからのことである。アラスカ「発見」の情報が届けられるや、ペテルスブルグの科学アカデミーはシベリア、カムチャツカ、アラスカ、そして日本への探検事業を統合して組織的な国策事業として再編成すべきことを決定（1726年）、41年には皇帝によってアラスカ領有が宣言されることとなる。その後の展開については次節以下で詳述するが、18世紀中に極東シベリア社会とアラスカに最大の画期をもたらしたのは1798年に設立されたロシア・アメリカ会社（露米会社）の出現であり、しばらくはその設立の背景と活動の内容に目を向けておく必要がある。

18世紀も末葉になってシベリアの領有・経営が一段落すると、ロシアは海洋帝国としての飛躍を望みはじめた。また何よりも、シベリアでの食糧確保と対外市場確保のために、中国や日本との貿易を拡大することが至上命令

となっていた。1796年7月、女帝エカチェリーナ2世は2年前に若宮丸に乗ってナホトカに漂着していた日本人水夫の一行を日本に送り届け、日露友好条約の締結を申し出る計画を立てた。ただしこの計画は、直ちにイルクーツクの毛皮商人団を分裂させることになった。というのは、誰が日本との貿易を支配するかは、今までにない巨額の利益を期待させたからである。

その後まもなくエカチェリーナの後を継いだ新帝パヴェルは、富国強兵策の目玉としてムイリニコフ某を中心にイルクーツクの有力商人団にアメリカ商事会社をつくらせた(1797年)。同社は、かねてより有力毛皮会社として羽振りをきかせていたシェリコフ・ゴリコフ商会と激烈な毛皮取引権の争奪戦をくり広げ、極東ロシア社会は一層の混乱に陥った。そこで、以後20カ年にわたってモスクワの皇帝からの正式の庇護(独占特許)を受け、陸海軍の後ろ楯を得るという約束の下に、まずは有力な毛皮商人を集めて合同アメリカ会社が設立され(1798年)、翌年の元老院決議によってこれがロシア・アメリカ会社に改組された<sup>(13)</sup>。シェリコフの娘と結婚して同社総支配人となったニコライ・レザノフが遣日使節として長崎に来航するのは、それからまもなくの、1803年のことである。

アラスカ湾内のコジャック諸島に本格的な交易所を設けてロシア・アメリカ会社が大大的に狩猟と毛皮取引活動を開始すると、カリフォルニアにまで南下をはかったロシア人と、カルフォルニアから北上をはかっていたスペイン人とが遭遇することになる。オホーツクや北太平洋では、<sup>カントン</sup>広東貿易になだれ込んだイギリスやフランスの毛皮業者とロシア人とが、ラッコ、アザラシ狩りに狂奔し、互いにしのぎを削り合う。そして同時に、ロシア人は北米大陸の毛皮フロンティアを西へと開拓していたカナダの狩猟者やアメリカ合衆国のマウンテンマンたちとも、コロラド河の流域などにおいて遭遇するに至る。毛皮の「世界フロンティア」は、謂わば太平洋北東海域において「結び目」を持ったと言えるだろう。その「結び目」を結んで毛皮の「世界フロンティア」の覇権を最終的に手中に収めるのは、実はアメリカ商人である。この時期のこの海域での各国の毛皮業者の活動については未だ十分な研究はす

すんでいないが、日本を含めたアジア諸国の「世界システム」への連結の問題に大きく関わることであり、ある程度の具体的な経緯については後でも詳しく論じてみたい。さし当たり次項では、オホーツク、アリューシャンでの毛皮フロンティアの展開に目を向けることにより、毛皮と奴隷制、および毛皮と強制的貢納制度の関係を今一度まとめて振り返っておく。残された史料は余りにも少ないため、そうした特異な課題については十分な説明は決して期待できる筈もないが、ぜひとも分析が深められておくべき研究分野であろう。ウラルからアリューシャンに至る広大な地域の無数の先住民の歴史や北米先住民の歴史を同次元に合わせ考えながら世界の歩みを考察・吟味してみるなら、シベリアとアメリカのフロンティアの歴史は、毛皮交易と係わった奴隷制・貢納制の展開という点で、ほぼ同質的な性格を持つという史実が浮かび上がる。砂糖やタバコや綿花と同じように、毛皮もまた、ヨーロッパを「中枢」として展開した「世界システム」の「中枢＝周辺」の関係の中に考察してみるべきなのである<sup>(14)</sup>。

## 2 アリューシャンの受難

コサック軍団の侵攻に先導され、黒テンの毛皮を求めてシベリア平原を東へ進んだモスクワ勢力は、イェルマークのシビル攻略からわずか60年ほどの内にユーラシアの東端に到達した。1632年、ヤクーツクに拠点を持った毛皮猟師たちは、48年にはユーラシア最東端のチュコト半島で毛皮資源の探索を行い、その翌年にコリマ山脈を越えている。カムチャッカ半島への本格的進出は諸般の事情から遅滞したものの、それでも1670年代には相当規模の探検隊が派遣され、この世紀末のロシア人によるカムチャッカ征服の先鞭がつけられている。1697年、ヤクーツクにあって東方の毛皮資源の独占を虎視眈眈と図っていたウラジミール・アトラソフは、同僚のコサック（ルカ・モロズコ）と手を組んで武装遠征隊を組織、日本とほぼ同等の面積を有するカムチャッカ半島の横断を敢行した。二人が率いた僅か60人のコサック軍団は破竹の進撃をつづけてたちまちの内に半島の全域を征服、先住のカ

ムチャダール人に過重な毛皮税「ヤサク」を課した。ヤサクを拒んだ村の住民は、全員殺された<sup>(15)</sup>。

ヤサク iasak, yasak は「整える」「統制する」といった語義を持つトルコ・モンゴル系統の言葉で、元来はユーラシア北半部一帯において毛皮の取り立てを組織的・強権的に統制するために考案された制度であった。すでにふれた通り「毛皮の貢納」ないしは「毛皮交易」というロシア語は、そこから派生したものである。具体的にはヤサクは、年に1回、武装軍団が辺境に散在する少数民族の集落を巡回し、一定量の毛皮を貢納させる形をとった。ロシア帝国では元もとは狩猟に従事する非ロシア人に課した現物税で、ビーヴァーやテン、黒テン、キツネ、ラッコなどの毛皮の国庫への納入という形でロシア帝国の主要財源の一端を構成したものであった。ピョートル大帝が数次にわたる全国規模の人口調査を行なって農民身分を「国家農民と農奴」に単純化したのは、ヤサク税を納める被支配層を確実に把握するという目的も持っていた。

ヤサクの徴収はヴォルガ中・下流域では15～16世紀から導入され、シベリアでは17世紀以降に一般化した。18歳以上50歳以下の男性住民すべてがヤサク賦課の直接の対象とされた。「既婚の男性には黒テンの毛皮10枚、独身者には同5枚、そして捕獲されたあらゆる毛皮に10分の1税を課す」と定めたのは、ロシア農奴制度確立の張本人ボリス・ゴドゥノフであった。このヤサクの貢納は単に税金の支払を意味しただけでなく、少数諸民族のロシア皇帝に対する絶対的臣従の公的な表現であった。

政治的服従心の真偽を確認するため被征服民に毛皮を代用貨幣として定期的に納めさせた訳であるが、モンゴル族がシベリアの西部に建国して一時強勢を誇っていたシビル汗国〔1556年～98年〕をイェルマークが征服した折にも、ロシア側は黒テンと銀ギツネの毛皮を毎年献納するよう強制している<sup>(16)</sup>。当初シベリアでは、毛皮獣は軍事指導者が中心となって捕獲をつけていたが、ヤサクの厳しい取り立ては、やがて下級兵士に義務づけられる課業として定着してゆく。当時ロシア帝国拡張の急先鋒となった下級の兵士

たちは十分なサラリーを与えられず、その代わりに酒類の醸造を認められ、居酒屋を経営することも許可されていた。そこで、その元手を稼ぎ出すためにも兵士たちはヤサクの取り立てや毛皮獣の捕獲に血道をあげるようになった。18世紀以後には、そうした兵士たち以外にブリヤート、タングート、それにヤクートの諸族からプライベートに毛皮の取引を行う商人が出て、その活動が顕著となった。彼らは特に中国との取引において商才を発揮し、その内の一部の者はロシア貴族として世襲の特権階級にまで申し上がった<sup>(17)</sup>。この点、アメリカの毛皮交易圏におけるペンシルヴァニア商人やスコットランド商人の抬頭（＝イギリスにおける Fur Baron の出現）と同じ特徴が、やはり見られたのである<sup>(18)</sup>。なお、プライベートな猟師・商人の出現によって毛皮獣がさらに急激に枯渇した点でも、シベリアのフロンティアと北米のフロンティアは全く同等と言える歴史をたどっていた。毛皮交易は、毛皮獣の絶滅をもたらしながら、中枢部における貴族層と辺境部における奴隷とを、同時に創り出していた。

さて、カムチャツカを征服したアトラソフらは、先住カムチャダールの民から 3200 枚の黒テンの毛皮をはじめ 191 枚のキツネの毛皮、それに 117 枚のラッコと 4 枚のカワウソの毛皮を獲得し、1701 年にはその毛皮を携えて意気揚々とペテルスブルグへと帰還、ピョートル大帝に献上した。アトラソフ自身はテンの毛皮 440 枚を得たが、テン皮 40 枚で着物 1 着分であるから、都合 11 着分が彼の手に入ったことになる<sup>(19)</sup>。アトラソフがカムチャツカ攻略に着手しはじめた年の翌年には、折しも、ピョートルの政府は官商隊を中国に向けて派遣している。「単子論」で有名なドイツの天才思想家ライプニッツ〔1646 年～1716 年〕と 20 年間にわたる親交を持ったピョートルは、度重なるライプニッツの献言により「アジア大陸とアメリカ大陸は陸つづきであるか否か」を解明するため、また毛皮をはじめとしたシベリア資源の確保をはかるため、早くから中国との友好関係の樹立を願っていた。第一回の官商隊の手により中国に運ばれたロシア商品の 85% は毛皮類で、他には皮革、雑貨類が送られた。中国との交易は、その後拡大の一途をたどり、特に

リス皮は年間 200 万～400 万枚という途方もない数量が輸出されたと述べる文献もある。間もなくカムチャツカ周辺からラッコやテンの毛皮が大量に送られはじめ、中国からロシア領内へは高価な絹製品や木綿、薬品類が流入することになる<sup>(20)</sup>(第 V 章において再論)。

18 世紀に入るとロシアの東方開拓策は一層本格化し、ヤクーツクやイルクーツク、そしてカムチャツカを本拠とした毛皮商人たちは事業活動をさらに大々的に拡張しはじめた。ベーリングやチリコフなど、後に歴史に名を残すことになる有名な探検家の調査活動によって、カムチャツカ周辺やアリュウシャン帯には中国市場で大いに需要が昂まっていたラッコやアオギツネ、アザラシ、ホッキョクギツネなどの毛皮が無尽蔵に近いことが報告されていた。いみじくも、アトラソフはカムチャツカ半島の東岸部を「ラッコの海」と命名している。1727 年に中国とロシアの間で結ばれたキャフタ条約によって北京の市場が開放されると、ヤクーツクとイルクーツクの商人たちは資金を出し合ってコサックに毛皮運搬のための多数の船を建造させることになった。41 年 11 月にはベーリングの一隊がカムチャツカ東方のコマンドルスキー諸島に上陸、ラッコの分布状態や生態の調査がはじまった。同年 12 月にベーリングをはじめ一隊の 6 割近くの者は壊血病や凍傷で死亡するが、残された 44 名の隊員は 800 枚のラッコ皮を携えてカムチャツカに無事帰還した。ベーリングの名にちなんで命名されたベーリング島の周辺で無数とも思われたラッコが絶滅するのは、それからわずか 15 年後のことである。アリュウシャンにはじめてロシア人が進出した年には 3000 頭のラッコが捕獲されたが、翌年度には 2000 頭、3 年目には 800 頭、4 年目には 600 頭、と目に見えて捕獲量は激減し、6 年目にはわずか 10 頭も獲れぬようになった、とも言われる。2 人のハンターだけで 1 年に 5000 頭も乱獲した島さえあった。このように、毛皮フロンティアにおける「掠奪のシステム」は、カムチャツカやアリュウシャンでも異様な早さで進展していった<sup>(21)</sup>。そしてこの「掠奪のシステム」は、単なる毛皮獣の乱獲だけではなく、毛皮獣棲息地に先住した少数民族住民の「人種奴隷制」への転落を伴ったのである。

1743年にはE・バソフの一行が一度の航海で11万ルーブル余りの利益に相当した1600頭のラッコを捕獲し、45年にはベーリングに同行したM・ネヴォドチコフがアリューシャン東部フォックス島の先住民を奴隷化して毛皮獣を大量に捕獲させた。コサックの命令に従わぬ島民は直ちに虐殺され、南北アメリカ大陸で展開されたのと同様な先住民征服事業が推進されていった。女子供は人質に取られ、男は酷寒の海辺でラッコやアザラシの毛皮を獲るのに使役された。思ったほどの数量の毛皮が集まらない時には見せしめのために苛烈な暴行と脅迫が加えられ、楯つく者は容赦なく虐殺されることもあった。2万5000人以上居たと言われるアレウト人は、まもなくほぼ絶滅という事態に陥った。イワン・ソロヴィエフという毛皮商のように「殺し屋」の異名をとる殺人鬼も現われ、老若男女の区別なく手あたり次第に先住民を虐殺して回ったと伝えられる。こうしたコサックの暴虐ぶりにはカムチャッカのロシア人当局者さえもが頭を痛め、1760年にはラッコの毛皮を山と持ち帰った2人のコサック商人が「原住民虐待罪」で鞭打ちの刑に処されるほどであった<sup>(22)</sup>。

毛皮の利益に目の眩んだこうした苛烈なコサック軍団の侵攻に対しては、無論のこと先住民の側からの抵抗も激しく、各地で蜂起のあったことが断片的ながらも伝えられている。1731年から翌32年にかけてはカムチャダール、45年から56年にかけてはコリヤークの民が蹶起してそれぞれ大規模な反乱を起こしている。ところが先住民の敵はロシアのコサック勢力だけに留まらなかった。すでに1643年、オランダが東インド会社に命じてハボマイ齒舞からカラフト樺太にかけてのオホーツク海南南部一帯においてラッコやアザラシの分布を調査、極東貿易での毛皮取引の可能性を探っていたし、18世紀にはスペイン、イギリスの毛皮船も北太平洋一円に出没しはじめたのである<sup>(23)</sup>。

スペイン船はアメリカ大陸北西部の先住民から手に入れた毛皮類を中国に運び、そこで水銀を仕入れて南米の鉱山での金の精錬に利用していた。1778年に至ると「キャプテン・クック」の通称で有名なイギリス人探検家ジェームズ・クック〔1728年～1779年〕が、第三回目の世界周航の途次にアラス



カからアリューシャン列島へと入り、どの停泊地においてもラッコやキツネ、クマ、トナカイ、オオカミなどの毛皮獣を捕獲・取引している。クックはその著『太平洋航海記』の中でアリューシャンにおけるロシア人による先住民の奴隷化に言及している<sup>(24)</sup>。クック自身はハワイで不慮の死を遂げたが、後継となったキャプテン・キングとその一行はハワイからカムチャツカ、千島列島を経て日本南岸海域を経由、広東のイギリス商館でラッコ、キツネなど高価な毛皮を大量に売りさばいた。マカオでは下級の水兵たちもラッコとひき換えに絹や木綿を手に入れることが出来、その後のイギリス人狩猟者によるラッコ乱獲狂騒の機縁となった。またアメリカ合衆国の毛皮業者も独立早々に広東貿易の可能性に目を向けはじめ、1783年以來、まずは南太平洋で毛皮獣の捕獲に狂奔しはじめていた。1784年、エムプレス・オブ・チャイナ号が広東に向け派遣され、積み荷としてビーヴァーをはじめシカやバッファローやオットセイなど、種々さまざまな毛皮類が満載された。しかし中国人が求めたのはラッコのほかはカワウソやアザラシ、ビーヴァー、そしてキツネの毛皮だけであった。そこでアメリカ商人は北太平洋海域に本格的に進出、アメリカ人によるラッコの大量捕獲がはじまった。まもなく1787年にはラッコ皮を満載したコロンビア号が広東に入港、アメリカ側はお茶との交換で大いに利益を上げたと伝えられる<sup>(25)</sup>。

さらに、鎖国下にありながらもオホーツク南端には和人（日本人）の進出も見られた。松前藩による蝦夷地開拓の波が押し寄せていたのである。松前藩は独特の「場所請負制」によって近江商人に加え江戸・大坂の大商人の資本を利用、先住アイヌの土地を蚕食しながら各地に運上所（交易所）を開設していった。請負場周辺の漁場には日本各地から荒くれ者や無宿の輩が集まり、その結果は先住アイヌの虐待と奴隷化であった。とりわけ国後島やその対岸の目梨地方でのアイヌ虐待は熾烈を極め、「大釜を三所へ建て候て、男夷女夷子夷を三段に分け置き、右釜にて粕と共に煮殺す」といった残虐な仕打ちがアイヌの側から訴えられたりしている<sup>(26)</sup>。結局この時期、北太平洋一円の地域は、ラッコやその他の海洋資源をめぐるロシア、オランダ、ス

ペイン、イギリス、アメリカ、そして日本の勢力が先住少数民族を奴隷化する無法の辺境地帯となっていた訳である。この地域の先住民が経験した筆舌に尽くしがたい受難については、遺された史料が余りにも乏しく、まさに史実の「氷山の一角」が知られているのみと言う外はないが、断片的な資料に残されたわずかな記録からも、毛皮交易をめぐる「略奪のシステム」の片鱗は、自ずと垣間見れよう。

### 3 ノア＝ウェスターズ

ところで、ここで再び北米大陸内部の毛皮フロンティアに目を向けてみたいが、ロシアやイギリスが太平洋の北部海域で毛皮・水産資源獲得のために激しく争っていた時期、北アメリカの西部・北西部のフロンティアでは、事態はどのようなものだったのか。これを調べてみると、毛皮フロンティアの支配権をめぐる覇権争いの構図は、北米大陸の支配権をめぐる国家間・階層間・人種間の覇権争いの歴史的な構図を、基本的にはそのままに反映していたことがわかる。

北米大陸の毛皮フロンティアでは、18世紀前半期までは主に五大湖およびハドソン湾周辺とオハイオ、それにアレゲニー台地一帯からミシシッピ流域にかけての大西洋側の東部・東北部地域において、イギリスとフランス、そしてオランダの三国が三つ巴の抗争をくり返していた。その抗争は、無論のこと毛皮争奪のための商業戦争というに留まらず、北米東部全域でのヘゲモニーの掌握を争う激烈な恒久植民地争奪戦争の絶えざる連鎖として展開した。しかもそれは国家間相互の対立を深める一方で、グロゼイエーやラディソンのような「無国籍・二重国籍の非合法商人」が出た例（前章第2項参照）からもわかるように、国家内部での各層の利害対立をおし拡げ、支配階級（国王・貴族・植民地官僚・特権商人など）と被支配階級（私的商人・農漁民・狩猟者など大半の移民）との間の対立をも深めるものであった。さらに、同階級内部の対立も激烈で、例えば官僚同士の争いや商人間の相互の争いは、時には、その後の社会情勢の全般的な展開に少なからず影響を及ぼす

場合があった。

こうした国家間戦争・階級間闘争・階級内抗争の複合に、地域間の利害対立が加わり、さらに先住インディアン対白人の人種間戦争と、インディアン相互の戦争（もっともこれは、オランダ対イギリスないしはフランス対イギリスの代理戦争であることが多かった）とが複雑に絡み合ったのが、当時の北アメリカ植民地を取り巻く全般的な歴史状況であった<sup>(27)</sup>。

こうした状況の中、毛皮の取引は少ない元手で莫大な利益を生み出していた。とすれば、遠く大西洋を隔てたイギリス本国の支配階級に牛耳られたハドソン湾会社だけに毛皮取引を独占させておくような道理はない——新大陸で生活する多くの毛皮商人たちがそう考えたのも当然の成り行きであった。第一、進取の気風に富んだ先駆的な移住者の多くは、元もと開拓ライセンスなどには縁のない狩猟者<sup>グルー・ド・ボワ</sup>（1710年頃、カナダの人口の10分の1以上は狩猟者）で、新大陸植民地への移住者たちは皆、もっと気ままでもっと自由な取引が出来ることを望んでいた。そこで、フレンチ＝アンド＝インディアン戦争が終結してパリ条約（1763年）が結ばれ、カナダにおけるハドソン湾会社の独占体制が明確にその条約で保証されるような事態が起こると、本国主導の取引活動の在り方に対して公然と敵対する企業活動が現われることとなった。即ち、ノア＝ウェスターズ Nor'Westers の登場である。

彼らノア＝ウェスターズは、元もとは大体においてモンリオールを活動の拠点とする商人であったため、イギリス領植民地から見て北西方向から来る商人、ということでこの名をもって呼ばれるようになった。フレンチ＝アンド＝インディアン戦争によるフランス勢力駆逐後にモンリオールに殺到したイギリス系移民や「居残り組」のフランス系の移民ばかりでなく、彼らノア＝ウェスターズにはさまざまな国籍混交 amalgamation が見られたという。ハドソン湾会社の社員でありながら体制派への反旗を翻した商人もノア＝ウェスターズの中に数多く含まれていたことは、やがて勃発するアメリカ独立革命の問題と係わって是非とも留意が必要である。フレンチ＝アンド＝インディアン戦争の終結でイギリスによってフランスの脅威が取り除かれ

た結果、今度は英本国支配者の与える脅威だけが新大陸移民への圧力となっていたのであり、そのことが、さまざまな階層の反英派を糾合する一因となっていた。

もっとも、新興ノア＝ウェスターズの抬頭に対して、ハドソン湾会社の重役たちは当初はタカを括っていた。広大な交易圏を抱えては、情報の収集も十分ではなかった。そのため、同社の活動圏は既に1740ないし50年代にはノア＝ウェスターズによって侵食されはじめていたにも係わらず、ハドソン湾会社の地方交易所の責任者たちがロンドンに宛ててノア＝ウェスターズの脅威について正式に報告を行なったのは、ようやく、1766年以後になってからのことであった。その年、フォート・オルバニーの責任者ハンフリー・マーテン（因みに“Martén”とは「白テン」を意味する）は「自分たちの砦はノア＝ウェスターズたちに取り囲まれ、せっかく毛皮を持って集まったインディアンも砦に寄りつけないようにされている」と窮状を訴えていたが、もはや事態は楽観できるものではなかった。ハドソン湾南西岸のネルソン河の河口に位置したヨーク<sup>ファクトリー</sup>商館は、当時ハドソン湾会社の最大の毛皮交易拠点であったが、そこからロンドンの理事会に向けてノア＝ウェスターズについての緊急報告が送られたのは、それから更に2年後の1778年に至ってからのことである。

元来、この頃までハドソン湾会社が行なった主な毛皮取引の方法は、湾沿いの河口地域に交易所や商館を設け、「果報は寝て待て」という次第でインディアンたちが年に何度か毛皮を持ち込んで来るのを待ち構えるというものであった（long-standing policy of “sleeping by the frozen sea” または “waiting at the Bay policy” と言う）。しかしこの時期にはすでに、毛皮取引の独占を維持するためには、ハドソン湾会社は重い腰を上げてでも、内陸部にも積極的に交易拠点 inland posts を設置する必要に迫られていた筈なのである<sup>(28)</sup>。

ハドソン湾会社が五大湖を離れ、内陸部にも<sup>ポスト</sup>交易所を置きはじめると、ノア＝ウェスターズとハドソン湾会社の毛皮争奪のせめぎ合いを通じて、カナ

ダ西部のフロンティアは急速に開拓されてゆくことになった。ハドソン湾会社による最初の内陸ポストは、1774年に、ロンドン生まれの毛皮商人サミュエル・ハルヌによってウィニペグ湖西方サスカチュワンに設けられた。同年にはイギリスは有名な「ケベック条例」を發布してフランス系入植者の保護という名目の下に王権による植民地支配を強化しようとしたが、この本国本位の植民地政策は、さらに一層モンリオールのノア＝ウェスターズたちの反感を駆り立てることとなった。事実、1776年、アメリカ独立のための戦いが起こるとカナダ地域もたちまちの内に戦乱に巻き込まれた。「ケベック条例」は本来、すでに事あるごとに本国の政策に抵抗の姿勢を示していたアメリカ13州植民地のイギリス系移民を牽制する狙いを持ったものであったから、牽制の拠点であったカナダが戦争のひとつの要衝となるのは、やはり当然の帰結であった。18世紀後半における英仏両国間の国際問題の最大の焦点がケベック問題にあった点についてはすでに指摘したが、後にアメリカ合衆国初代大統領となるジョージ・ワシントン〔1732年～1799年〕が常づね指摘していた通り、当時ケベックは英本国軍のための最大の「武器貯蔵庫」になっていた。

アメリカ独立戦争の火ぶたが切って落とされると、13州植民地軍とイギリス本国軍による激しい戦闘のために、一時カナダ地域での毛皮交易は寸断されてしまうが、その混乱の中からカナダの毛皮交易圏を再編成し、ハドソン湾会社の独占的地位を脅かす動きが具体化してゆくことにもなる。争乱の間隙をぬって、才覚のある「もぐり商人」たちが交通の要衝に毛皮交易の拠点を新たに設け、河川と湖沼の網の目のような経路を結び合わせて、無数に棲息すると思われたビーヴァーやテン、麝香ネズミ、ヤマネコ、クマ、キツネなどの毛皮を大量に取引しはじめたのである。争乱のつづく時期には、旧来の限られた生活圏を離れて、新たに未踏のフロンティアをめざそうとする動きが、にわかに盛んとなる場合が多い。

その最初で最大の、そして最も大きな影響を示した事例は、ニュージャージー生まれのアレクサンダー・ヘンリー〔1739年～1824年〕によるマキナ

ック島の開発であった。マキナック島はミシガン湖とヒューロン湖を結ぶ水路に位置した小島で、五大湖周辺の毛皮資源を集散するのに最適の拠点であった。ヘンリーの展望は、このマキナック島を本拠にスペリオール湖の北西部ならびにカナダ西部の未曾有の毛皮を集散し、イギリス、ヨーロッパ市場に大々的に送り出すというものであった<sup>(29)</sup>。

ただし、アメリカ独立戦争の最大のヤマ場と言われるヨークタウンの攻防戦が展開された1781年に至り、ヘンリー自身は毛皮取引から身を引き、“従来からの内紛・過当競争を排するため”と称して、自分の得た権益をノア＝ウェスターズたちに売却する。ノア＝ウェスターズの方でも、アメリカ独立戦争でカナダの領有問題や毛皮取引が混乱を極めている上、天然痘の蔓延でインディアンが激減、取引は思い通りに進捗しないという苛立ちを抱いていた折のことであったため、カナダ地域で活動する毛皮商人には再組織化が是非とも必要だと感じていた<sup>(30)</sup>。1783年、ノア＝ウェスターズたちはヘンリーのきり拓いた商業路を基盤に大同団結、モンリオール商人を中心として「北西会社 North West Company」を結成するに至った。新会社結成の音頭をとったのは、スコットランド高地<sup>ハイランダー</sup>出身のモンリオール商人、サイモン・マクタヴィッシュとジョセフ・フロヴィシャーの二人であった。この北西会社は、1821年にハドソン湾会社に吸収されるまで、五大湖周辺の毛皮交易の展開に重要な地位を占めてゆくことになる。

もっとも、毛皮取引のもたらす法外な利益に、ノア＝ウェスターズに当初から見られた国籍混交が加わったことは、やはり会社の運営にとっては大きな不安定要因であった。1784年に行われた最初の毛皮の集荷に際して、北西会社の社員間に早くも利害の対立が起こっている。とりわけマクタヴィッシュと元アメリカ商人のピーター・ポンド、ピーター・パングマンとの対立は際立ったものであった。ポンドは“Bloody Pond”とアダ名された人物で、後にアサバスカ湖周辺の毛皮の権益をめぐるウォーデン某やジョン・ロスを殺害した男と噂された冷血漢である。ポンドはイングランド出身のジョン・グレゴリーや、そのパートナーであったハイランダーのアレクサンダ

ー・ノーマン・マクロードと手を組み、会社の支配権の掌握を目論んだ。グレゴリーたちは、後に Sir の称号を得るスコットランド商人アレクサンダー・マッケンジーやその甥のロードリック（ロス）・マッケンジーと協力関係にあったから、結局、マクタヴィッシュを中心としたカナダ商人勢力と、ポンドを領袖としたアメリカ商人・イギリス商人・スコットランド商人の連合とが、北西会社の運営をめぐって内紛劇を演じていた、という図式になる。ポンドは、「連合」側の利益を守るために、カナダの詳細な地図をエカチェリーナ 2 世に直接献じて、ロシア勢力との連携さえも画策していたようである。

内紛は北西会社分裂の危機を常に孕みながら、一応、アサバスカ湖の権益はロスに、チャーチル河はマッケンジーに、サスカチュワンの一帯はパンダマンに、そしてレッド河はポロック某に、といった形で「ナワバリ配分」することで決着が図られた。マクタヴィッシュの甥のウィリアム・マクギルヴェレイは、イングリッシュリヴァーでロス・マッケンジーと遭遇、意気投合して毛皮狩猟団（後述「アメリカ西部の毛皮フロンティア」の項目参照）を組み、陽気にシャンソンを唄いながら共に毛皮採取に従事したといい、派閥対立も内陸フロンティアでは自然と解消される傾向があった。しかしながら、特に豊富な毛皮の宝庫と見られたアサバスカ湖の権益をめぐって、ポンドが“a peaceful and fair man”と言われ人望の厚かったジョン・ロスを殺害するに至ると、マクタヴィッシュ、フロフロヴィシャー、グレゴリーの3名の取引所を中心として北西会社は再編されることとなり、ポンドは排斥された。再編後の会社はモントリオールに<sup>モウ</sup>簇生していた中小の毛皮会社を吸収、アッシニボワヌ渓谷や五大湖（ウニペグ湖）周辺、それにスワン河流域など、当時「毛皮商人の楽園<sup>パラダイス</sup>」と言われていた地域に活動範囲を拡張した。経営も相当規模に膨らんだようで、アレクサンダー・マッケンジーは「カヌーの漕ぎ手だけで1200名が働いていた」と書いている<sup>(31)</sup>。

やがて1795年には、ミズーリ河流域のマンダン地方開拓の拠点となるアッシニボワヌ取引所が開設され、カナダ西部の毛皮フロンティアをめぐって、

北西会社とハドソン湾会社との対立は一挙に激化することになった。言うまでもなく、ノア＝ウェスターズによる交易圏の拡大はハドソン湾会社の利益を蚕食する一方で、北西会社の側に飛躍的な収益増大をもたらした。すでに1788年、北西会社は4万リーヴルの取引を行い、同世紀末にはその3倍の利益をあげた。1763年には10万6000枚のビーヴァー皮と3万2000枚のテンの毛皮をはじめとして、1万6000枚の麝香ネズミの毛皮、6000枚のオオヤマネコの毛皮、2100枚のクマ皮、1800枚のミンクの毛皮が取引され、90年代には10万6000枚のビーヴァー皮と3万2000枚のテン、1万7000枚の麝香ネズミ、そして1万1800枚のミンクの毛皮、総計18万4000枚の毛皮が売られたと言われる。こうした莫大な量の毛皮の取引により富を蓄えた重役たちは「領主権」を買い取り、カナダの新興貴族として勢威をふるった。西インド諸島やアメリカ南部の奴隷主プランターと同様に巨大なマンションハウスを建てたり、さらにはイングランドやスコットランドに帰って広大な土地を買い占める者も現われた。ここにも、Fur Baronが現われたのである。因みに、北西会社の創設と再編の最大の立役者であったマクタヴィッシュは1802年にチェスターの町に1万5000エーカーにおよぶ土地を買い、モントリオールの山の麓に大邸宅を建てて「テルボンヌの領主」と呼ばれた。もっとも、マンションハウスは無能な息子の代に廃屋となり、「マクタヴィッシュの幽霊屋敷」と呼ばれて観光名所として知られることになる<sup>(32)</sup>。

なおカナダにおいて毛皮貴族が生まれた裏側には、やはりシベリアや植民期アメリカのフロンティアにおける場合と同じように、先住民の「清掃」が伴っていた。元もと北西会社の毛皮取引の方法には形<sup>なり</sup>ふり構わぬ強引なところがあり、インディアンたちに質の悪いアルコール類を大量に売りつけて一攫千金を得る手段にする、ということがあったと伝えられる。後にジョン・ジェイコブ・アスターの項目で見ると、アルコールによる先住民社会の破壊は毛皮交易圏の拡大に伴った常套手段としてフロンティアの至る処で展開されてゆくことになる<sup>(33)</sup>。この点、先住インディアンとの間に比較的友好的な関係を作り上げて北西部の毛皮取引を順次支配したハドソン湾会社の



ジョージ・シンプソン [1787年～1860年] が、1821年に北西会社を合併吸収したこと (=新ハドソン湾会社の設立) は、如何にも皮肉な史実であったということになる。シンプソンはスコットランドのロックブルーム生まれ。当時世界中に快進撃をつづけていた新興スコッチ商人の典型で、緻密な計算と独特の高貴さを感じさせたプライド、そして何より旺盛な克己心に富んでいたと言われる。北西会社を併合後、1826年から60年に至るまで、実に45年の永きにわたりハドソン湾会社頭取として活躍、同社が世界最大・史上最長命の株式会社として発展する基礎を築いた人物として「小皇帝 Little Emperor」と尊称されている。1841年には、英国女王よりナイトに叙せられている。彼の頭取時代にハドソン湾会社の所領は現アメリカ合衆国領の北西海岸地域にまでおよび、カナダの毛皮フロンティアも「世界フロンティア」として完結するに至る。彼はインディアンとも、ロシア・アメリカ会社とも、共に友好的な関係を結ぶことに腐心し、更に外部勢力との安定的な関係を基盤にアラスカの氷を大量にサンフランシスコに販売することなどを思いつき、大きな利益を生み出したのである<sup>(34)</sup>。

ここに見てきたように、五大湖周辺とカナダ北西部のフロンティアは、フレンチ＝インド＝インディアン戦争とアメリカ独立革命の動乱の前後に、ハドソン湾会社と北西会社 (ノア＝ウェスターズ) の拮抗を通じて西へ西へと開拓されてゆく<sup>(35)</sup> 訳であるが、同じ頃、ヨーロッパの片田舎から出てイギリス、そしてアメリカへと渡り、一代にしてアメリカ合衆国西部の毛皮交易網を支配、世界史上最初の本格的トラストと言われる企業合同組織を作り上げ、さらに中国との貿易を一手に独占してゆく怪物商人が毛皮の世界に現われることになる。ジョン・ジェイコブ・アスターの登場である。

#### 注

- (1) 第三章の4～6に関しては、すでに以下の論文・著作で概略を論じたことがあるため、本誌の紙数の都合も鑑み、割愛することとした。「植民期アメリカの毛皮交易：インディアン奴隷制の展開にふれて」(龍谷大学『社会科学研究年報』第20号、1990) 58-80、『近代世界と奴隷制：大西洋システムの中で』(池本幸三・布留川正博と共著、

人文書院, 1995)。

- (2) チャンセラーの探検については, R. Hakluyt, *Voyages and Discoveries: The Principal Navigations Voyages, Traffiques and Discoveries of the English Nation*. (Penguin Books, 1985) 60-66. 伊東秀征「リチャード・チャンセラーの北東航路探検とロシアの〈発見〉」(『ロシア史研究』第40号, 1984), 同「探検者とモスクワ会社: R. チャンセラーとロシア見聞録」(『北陸史学』第34号, 1985)。
- (3) J. F. バッデリー「ロシア・蒙古・中国: その歴史的関係」(荒井孝太郎訳, 季刊『ユーラシア』第4号, 1972) 127-128。
- (4) H・トロワイヤ『イヴァン雷帝』(工藤庸子訳, 中公文庫)。
- (5) この点については, 次の諸著作の参照が必要である。O. Patterson, *Slavery and Social Death; A Comparative Study*. (Harvard University Press, 1982) 77-101, 388-389. 司馬遼太郎『ロシアについて』(前掲) 69-70. 阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男: 伝説とその世界』(平凡社, 1974) 97頁以下。同『ヨーロッパ中世の宇宙観』(講談社学術文庫, 1991) 112頁以下。仲手川良雄『歴史のなかの自由: ホメロスとホップズのあいだ』(中公新書, 1986) 89頁以下。
- (6) ボリス・ゴドゥノフはプーシキンの叙事詩『ボリス・ゴドゥノフ』やトルストイの韻文史劇『皇帝ボリス』, それに「ロシア・オペラの最高傑作」と評されるドビュッシーの『ボリス・ゴドゥノフ』により一般にもなじみが深い管の人物であり, ここで改めて説明するには及ばない。
- (7) J・F・バッデリー, 前掲論稿, 145-148. 164-165。
- (8) R. Delort, *L'Histoire de la Fourrure de l'antiquité à nos jours*. 138-150. 大橋與一『帝政ロシアのシベリア開発と東方進出過程』(東海大学出版会, 1974) 83頁以下。N・エッティンガー『秘められたアジア内陸』(集英社「探検の世界史」10, 1975) 30-39。
- (9) バッデリー, 前掲論稿, 164-167。
- (10) なお, 1652年に毛皮収集場として建設されたイルクーツクは1686年に黒テンをくわえた虎を町の紋章としている。バッデリー, 同上論稿, 180-181。
- (11) 差し当たり以下を参照。大下尚一編『ピューリタニズムとアメリカ』(南雲堂「講座アメリカの文化」1, 1969) 99-128. 曾根暁彦『アメリカ教会史』(日本基督教団出版局, 1962) 第3章~第5章。巽 孝之『ニュー・アメリカニズム: 米文学思想史の物語学』(青土社, 1995) 39-69。
- (12) ロシアでの最初の日本語学校はすでに1705年, 後に本稿でも名を挙げるコサックの頭領アトラソフに援助を受けた大坂の漂流民, 伝兵衛を教師とした学校がベテルブルグに開校している。高倉新一郎『蝦夷地』(至文堂, 1962)。高野 明『日本とロシア』(紀伊國屋書店, 1971)。中村新太郎『日本人とロシア人』(大月書店, 1978)。
- (13) S. B. Okun, *The Russian-American Company*. (Cambridge, 1951)。郡山良光『幕末日露関係史研究』(図書刊行会, 1962)。木崎良平『漂流民とロシア: 北の黒船に揺れた

幕末日本』(中公新書, 1991) 第4章。

- (14) 以上本項の記述については、上に注記した引用文献の他に、阿部重雄『コサック』(教育社歴史新書, 1986)。も参照されたい。
- (15) 黒田乙吉『北氷洋の探検』(筑摩書房, 1952) 56-85。L. S. ベルグ『カムチャッカ発見とベーリング探検』(小葉有米訳, 原書房, 1982)。アトラソフの暴虐の一端は、すでに日本でも寛政2年(1790年)、前野良沢の『東察加志』(内閣文庫蔵)により、江戸時代の知識層に知られていた。加藤九祚『シベリアに憑かれた人々』(岩波新書, 1974) 101-114。
- (16) Noonan, op. cit., 327. R. Grousset, *The Empire of the Steppes: A History of Central Asia*. (Rutgers University Press, 1970) 586. A. Wood, ed., *The History of Siberia: from Russian Conquest to Revolution*. (Routledge, 1991) 18-21, 37-38, 41-43. B・O・クリュチェフスキー『ロシア史講話』(八重樫喬任訳, 恒文社, 1983) 第4巻第63講, 121-137。同書第3巻第51講(275頁の注1)によると、ヤサクは17世紀から徐々に貨幣で代納されるようになった。ヴォルガ流域では1720年代に、そしてシベリアでは一部の地域を除き1822年に人頭税が課されるに至って、ヤサク税住民はロシア人農民と同等な権利・義務を負うようになったという。
- (17) E. Wolf, *Europe and the People without History*. (University of California Press, 1982) 182-184。
- (18) E. C. Kirkland, *A History of American Economic Life*. (Appleton-Century-Crofts, 1969) 20-24。
- (19) 加藤九祚前掲書, 110。
- (20) 大橋與一『帝政ロシアのシベリア開発と東方進出過程』(東海大学出版会, 1974) 150-151。同書154頁によると、対中国貿易に関しては個人事業者間の競争が激しく、密貿易が激増して官営貿易は阻害された。それゆえ、1728年から1755年の間に派遣された官商隊は、わずか6隊に留まったというのである。この点でも、大西洋経済圏に展開した毛皮交易や奴隷貿易に相通じる特徴があった。なお、「リス皮400万枚」という数量は、日本の鎖国時代に北アメリカ植民地やアジア一帯で乱獲され、当時の社会経済の動向に重要な経済的意義を持ったビーバー皮や鹿皮の取引量をさえ遙かに凌ぐ桁外れな数量であることに留意しておきたい。
- (21) 黒田乙吉『北氷洋の探検』(筑摩書房, 1952) 56-85。吉川美代子『ラッコのいる海: 人間はいかに生態系を傷つけてきたか』(立風書房, 1992) 63-67。なお、18世紀以前には北太平洋全域に15万ないし30万頭もいたと推定されるラッコは、20世紀の初頭にはわずか1000頭に激減、北アメリカ大陸でバッファローやリョコウバトがたどったのと同様の絶滅状態に陥っている。吉川美代子同上書, 54。および藤原英司『アメリカ動物滅亡史』(朝日選書, 1976)。
- (22) 長沢和俊『世界探検史』(白水社, 1976) 179-182。
- (23) 北構保男『1643年アイヌ社会探訪記: フリース船隊航海記録』(雄山閣, 1983)。C・

- オークン『カムチャッカの歴史』（原子林三郎訳，大坂屋号書店，1943）149-137。
- (24) キャプテン・クック『太平洋航海記』（荒 正人訳，河出書房，1955）。
- (25) 吉川美代子上掲書（66頁）では，コロンビア号が広東入港船の嚆矢であるかのように書かれているが，それに先行した船舶は幾つかある。F. R. Dulles, *The Old China Trade*. (repr. of 1930, AMS Press). S. E. Morison, *Maritime History of Massachusetts, 1783-1860*. (New England University Press, 1979). などを見られたい。
- (26) 新谷 行『アイヌ民族抵抗史：アイヌ共和国への胎動』（三一新書，1972）110-139。
- (27) 毛皮をめぐる列強諸国の抗争の結果は，当初はインディアンとの友好・敵対関係の在り方，とりわけ強勢を誇ったイロクォイ連合，チェロキー・インディアン，クリーク・インディアンとの関係により大きく左右された。T. E. Norton, *The Fur Trade in Colonial New York, 1686-1776*. (University of Wisconsin Press, 1974) 7-42. G. B. Nash, *Red, White and Black: The Peoples of Early America*. (Prentice-Hall, INC., 1974) 88-120, 239-275.
- (28) A. J. Ray & D. Freeman, 'Give Us Good Measure, 'An Economic Analysis of Relations between The Indians and The Hudson's Bay Company before 1763. (University of Toronto Press, 1978) 192-197.
- (29) マキナック島周辺のインディアンたちが用いる厚地の格子縞のラシャで作った両前の半コートは，今でも「マッキノー・コート」として有名である。田中千代編『服飾事典』（同文書院，1969）「コート」の項目参照。なお，ヘンリーは後にミシシッピ支流のレッド河周辺を探検したりモンリオールで商売に従事したりしながら余生を送り，『カナダおよびインディアン居住地への旅と冒険：1760年-1776年』と題する自伝を出版（1806年）したりしている。G. Bryce, *The Remarkable History of the Hudson's Bay Company, including that of The French Traders of North-Western Canada and of the North-West, XY, and Astor Fur Companies*. (Burt Franklin, 1968) 169-174.
- (30) *Ibid.*, 115.
- (31) *Ibid.*, 116-120.
- (32) *Ibid.*, 121-122. I. A. Johnson, *The Michigan Fur Trade*. (Michigan Historical Commission, 1919) 78-101.
- (33) H. M. Chittenden, *The American Fur Trade of the Far West: A History of the Pioneer Trading Posts and Early Fur Companies of the Missouri Valley and the Rocky Mountains and of the Overland Commerce with Santa Fe*. (Academic Reprints, 1954) 22-31. Norton, *op. cit.*, 31-32, 207-208, et passim.
- (34) Bryce, *op. cit.*, 268-280.
- (35) フレンチ=アンド=インディアン戦争の後，パリ条約からアメリカ独立革命期に至る毛皮フロンティアの全般的な情勢については関連文献は枚挙に暇がないが，本稿の記述に係わっては，上記注(27)~(29)の諸文献と共に四元忠博「旧植民地貿易政策と7年戦争」（埼玉大学『社会科学論集』第63号，1988）. および *The French and Indian War*

Homepage (<http://web.syr.edu/~laroux/>) を参照した.

